

研究の概要（平成29年度）

- 1 研究主題 「三感」＋「実感」のある授業の創造
～確かな学力を身に付けた子どもの育成～

2 主題設定の理由

（１）子どもの実態・子どものよさと課題から

子どもたちはグループ(ペア)学習を通して自分の考えを聴き合ったり、伝え合ったりすることで友達と学び合うよさを感じている。また、「分かった、できた」という喜びを味わい、やる気をもって学習に臨む子が増えてきた。その反面、全国学力・学習状況調査や県の定着度調査から本質的な部分での理解につなげていないことが明らかとなったり、相手を意識した話し方・聴き方ができなかつたりという実態が見られる。

また、本校は長年理科教育に力を注いできたため、子どもたちも自然科学に興味をもち意欲的に学習に取り組んでいる。理科教育ならではの実際の事物に触れたり体験を通してすることで、得られる「実感」を感じて学習に臨んでいる。しかし「実感」の中でも実験や体験を通して得られる実感(体得の理解)は身に付いていると感じるが、主体的な問題解決を通しての実感(習得の理解)や、得たものを実生活の中で活用していく実感(納得の理解)においては、教師の手立てや工夫が必要だと思われる。

これらの子どもの姿から「三感」(存在感・達成感・共感)と「実感」を大切にした授業づくりをし、「確かな学力」を身に付けた子どもの育成に努めたい。

（２）求められる学力から

これから求められる学力として「21世紀型スキル」が挙げられている。これは、「基礎力」「思考力」「実践力」の3つで構成されている。その中でも、本校の子どもたちに一番必要な力は「思考力」「実践力」だと考える。ただ、実践力は子どもたちの成長過程や生活環境の中で着実に力となっていくものと考えするため、中学校までの長期的な視点で育てたい。そのため、小学校では、自ら問いを生んだり、考察や推論をしたりする言語活動を通して、「思考力」を育てていきたいと考える。

（３）学校教育目標、重点目標から

本校の学校教育目標は「一心に学び 高め合う子」である。「一心」とは、物事に夢中になって取り組む姿であり、みんなで心をつなげて取り組む姿である。重点目標は「学校づくりは学級づくり 学級づくりは授業づくり」であり、授業づくりを核にして学校づくりを推進したいと考えている。自分のよさを発揮できる授業(存在感)、分かった・できたという喜びがもてる授業(達成感)、友達の存在を認め合える授業(共感)、これら「三感」のある授業が、確かな学力を育むことにつながると考える。平成26年度から掲げている「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」を大切なキーワードとして授業づくりを進めていきたい。

(4) これまでの研究経過から

本校では、昭和54年、教育課程指定校として理科教育研究の歩みをはじめて以来、今日まで長年に渡って研究を推進してきている。

近年は、研究主題を「自然と向かい合い、五感を働かせて学ぶ子の育成」として、「実感を伴った理解」を図る授業づくりに取り組んだり、窓口となる教科領域を広げながら「聴き合い、学び合い」に重点を置いた授業づくり、その基盤となる学級づくりに取り組んだりしてきた。

平成27年度は、子どもの実態やこれから求められる学力を踏まえ、思考力や問題解決の力を高めるために窓口教科を理科・生活科にし、授業研究と授業改革を核とした研究を進めてきた。その結果、「理科・生活科で身に付けた問題解決の力が他教科でも活用された。」「子ども自身が存在感・共感・達成感を感じられた。」「グループ・ペア活動を行うことで子どもの考えに深まりが見られた。」という成果があった反面、「学んだことを生活の中で活用していくことができない。」「個の見取りが十分にできない。」「付けたい力を付けるための手立て(仕掛け)が十分でない。」などの課題が挙げられた。

平成28年度も引き続き「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」のキーワードを大切にしたい単元や授業を構成するとともに、付けたい力を明確にしたり、その力を付けるための手立て(仕掛け)の工夫をしたりすることに、よりいっそう力を入れてきた。また、学んだことを実生活の中で生かしていく活用力の育成を目指した研究を進めることで、より「生かす理科教育」の実現を図った。付けたい力の育成や学習への意欲、グループ活動への主体的な取り組みなどの成果はあったが、一方で、子どもたちが、その単元で身に付けた力を生活の中で生かしていく力の育成は不十分であった。また、知識としての定着を図るための教材研究や授業での「仕掛け・確かめ」がさらに必要であると感じた。

そこで、平成29年度は、以下の点について研究を進め、理科・生活科の研究を進めていくことで、問題解決の能力(3年：比較 4年：関係付け 5年：条件制御 6年：推論)を育てることに努めたい。

3 研究内容

「三感」(存在感・達成感・共感)のある授業を作ることが、「確かな学力」を育むことにつながると考え、「三感」のある授業づくりのために以下の2点について研究を進めていく。

(1) 「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」を大切にしたい授業の工夫

- ・付けたい力を明確にする。(新学習指導要領も視野に入れ、学習指導要領に示されている目標や内容を確認する。)
- ・ペア・グループで考える効果的な場を設定する。(アクティブラーニング)
- ・どの子ども学びのステージに上げる工夫をする。(ユニバーサルデザインの視点)

(2) 活用力を育てる授業の工夫

- ・身に付けた力を生活の中で生かす工夫をする。
- ・子どもの「やってみたい」「調べてみたい」を引き出す工夫をする。
- ・授業の振り返りの工夫をする。

4 研究方法（チーム一心として、教師同士も「三感」を大切にしていきたい。）

（１）研究の視点を踏まえた授業を推進する。

○各学年団で研究授業、公開授業の指導案の検討を行い、チームによる授業づくりを進める。

- ・「付けたい力」の確認、指導案作成、教材研究などを研推メンバーが中心に行う。
- ・授業研究後は、研推(低：清彦 中：金原 高：熊切 = 授業研究グループ)のメンバーが中心となり授業の振り返りをする。

～グループ～

低学年・・・１年担任、２年担任、岡本

中学年・・・３年担任、４年担任、片桐、土田、美智子

高学年・・・５年担任、６年担任、山本、敏之、川口

○学級担任は理科、または生活科(目標(2)の内容)の授業を、級外は自分の授業(細案)を年に１回公開する。

〈授業研究の視点〉

事後研修の目的は、優れた授業の追究ではなく、全ての子どもを学びのステージに上げ、付けたい力を確実に付けることができたかという視点で研修する。手立てや仕掛けが有効であったか、本気になる課題や問題であったかなど、子どもの表れから学ぶ。

○平成２９年度大研究授業計画

回	月 日	授 業 者
１（提案授業）	５／１０	池谷
２	／	
３	／	

○授業研究後に、成果と課題をまとめ、次の授業に生かす。

（２）理科・生活科の教科指導力を身に付ける、磨く

○先生を招き、模擬授業や講座をとおして、理科教材研究を深める。

○理科について学ぶ学習会を行う。（書籍や学習指導要領などを読む）

○理科室や校内にある教材教具を知り、実際に使ってみる。（模擬授業や予備実験を行う）

- ・学年団や学年ごとに活動する。
- ・研推(低：安西 中：池谷 高：福川 = 教材研究グループ)メンバーが中心となって、活動の計画やまとめを行う。

(3) 学びのつながりをもたせ、子どもの知的興味関心を高めるために、幼、小、中、高の連携と一貫を図る。

○磐田南高校と授業や体験活動などを通して、連携を図る。

○なかいすみ学府での授業研究に参加することで、それぞれの学校のよさを学ぶ。また相互交流授業をとおして、子ども理解を深め、9カ年にわたる見取りと身に付けるべき力を明確にする。

(4) 理科・生活科教育を支え、子どもの自主的な学びを促す環境を整える。

○委員会活動を中心にした「おもしろ実験講座」開催する。

○ヤングサイエンスクラブの藤村さんたちの協力による理科クラブの活動を行う。

○理科・生活科の教材の充実と理科室・教材室の環境整備を進める。

○ビオトープの環境整備を行う（理科おまかせ委員会中心に）。